



TITLE:

# 海外の図書館の動き

AUTHOR(S):

倉橋, 英逸

---

CITATION:

倉橋, 英逸. 海外の図書館の動き. 静脩 1979, 15(5): 1-3

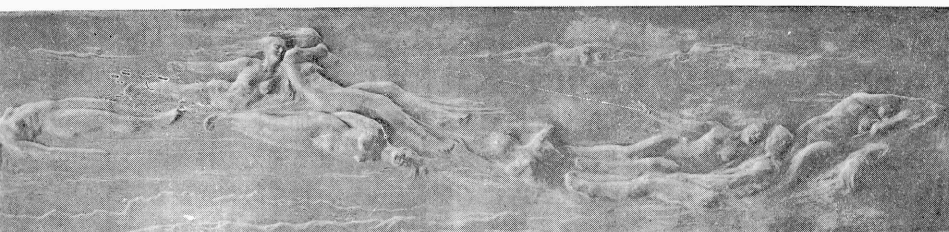
ISSUE DATE:

1979-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36830>

RIGHT:



# 静脩

1979年1月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 15, No. 5

## 海外の図書館の動き

附属図書館整理課長 倉 橋 英 逸

今度、海外の図書館事情の視察を命ぜられ、大学図書館の管理・運営、建築、機械化について調査したが、この短期間の調査旅行の中で特に印象的であったのは、各国の大学図書館が、資料費の不足と職員数不足の中で、研究者の情報要求に如何に対応するかを真剣に追求している姿であった。情報量の爆発により、個々の大学図書館だけの能力だけではその大学の情報要求に答えられなくなり、図書館同志が協力し合わなければならないという考え方が一般化しており、今日の技術革新の象徴である電算機と通信技術を使って各図書館を結び、この網を全国的な規模にまで広げることにより最終的には全国の図書館を一つの協力体制の中に包含する方向に向かっていることを感じた。

図書館に置かれた端末機の利用により、世界各国の新刊出版リストができ、発注・目録作業も検索された目録データを使って処理し、また、全国の図書館の所蔵調査とその借用申込みもできる夢のような図書館は想像するだけでも楽しいが、現実にこのような図書館が海外ではできつつある。このことを可能にしたのは機械可読目録である。これはMARC (Machine Readable Cataloging) と呼ばれ、各国の出版物の目録データを機械可読の形に入力したもので、このデータベース

を各々の図書館が検索することにより、目録作業を軽減し、その入力形式の国際的標準化によって図書館間の情報交換を容易にし、図書館ネットワークを推進する役割を果たしている。現在、この事業は米国、英国、カナダ、フランス、ドイツ、日本等で行われている。

今回は紙面の都合もあり、このMARCを使った図書館ネットワークに焦点を合わせて、英・加・米の図書館の事情を報告し、これに関連する国内の動きについても少し触れたい。

英国の全国的なネットワークとしては、英国国立図書館のBLAISE (British Library Automated Information Service) というシステムがあり、ロンドン、ブリストル、バーミンガム、マンチェスター、ボストン、エディンバラに中継所をもつデータ通信回線を通じて、参加館は最も近い中継所に電話回線によって接続することにより、情報検索、受入業務、目録業務、所在調査、相互貸借業務をオンラインで処理できる。欧州共同体のデータ通信回線のEuronetを通じて欧州大陸の図書館もこれに参加できる。また、このBLAISEの機能の上に雑誌管理業務の付加、目録作業のための典拠ファイルの新設、二次情報データベースの増設をすることにより、さらに充実したMERLIN (Machine Readable Library

Information) の開発が進められている。

地域ネットワークとしては、まず、バーミンガムを中心とする各種の図書館を含む BLCMP (Birmingham Libraries Co-operative Mechanization Project) があり、現在はオフラインの共同目録作業のシステムであるが、近々オンラインによる受入業務及び目録業務のシステムに切り換える予定である。次にブリストル大学を中心に近隣4大学のネットワークとして SWALCAP (South West Academic Libraries Co-operative Automation Project) があり、貸出業務及び目録業務をオンラインで処理している。さらにエディンバラのスコットランド国立図書館を中心に SCOLCAP (Scottish Libraries Co-operative Automaton Project) があり、その近辺の各種の図書館が参加して、オンラインによる受入業務と目録業務の処理を行っている。

このように英国では全国的ネットワークと地域ネットワークの両方が発達しつつあり、現時点では双方の関係は必ずしも明確ではないが、今後はますます後者を充実し、前者は後者のどれにも参加しない図書館を包含し、同時に各地域ネットワークと結ぶことにより書誌情報の交換を行い、全体として全国図書館ネットワークの形成に向かうと考えられる。

カナダ国立図書館は DOBIS (Dortmunder Bibliothekssystem) を西独より導入し、現在は一部しか移動していないが、将来は館内業務全般、連邦政府機関図書館のネットワーク化、地域ネットワークとの書誌情報交換・相互貸借業務処理の要として働くように計画されている。

地域ネットワークとして最も機械化の進んでいるのはトロント大学の中にある UTLAS (University of Toronto Library Automation System) であり、トロントを中心に各種の図書館が参加している。これは CATSS (Catalog Support System) と CIRC (Collection, Inquiry, Reporting and Communication) に分かれており、前者は目録業務、後者は貸出業務、雑誌管理、受入業務、管理統計、目録検索を対象業務としている。CATSS では参加館は直接本部の電算機と

直結するが、CIRC では参加館にミニコンを置き、間接的に結び付くことになっている。目録業務のように全国的規模の書誌情報交換を必要とする業務は集中処理し、受入・貸出業務のように個々の図書館に属する業務には参加館にミニコンを置き、大部分をそこで処理させる考え方は英国の SWALCAP にも見られたが、従来の図書館ネットワークが集中処理至上主義であったのに対して部分分散処理に移りつつあるのは世界的な傾向だと感じた。これはミニコンの性能の飛躍的上昇、価格の低下と共にパッケージ・システムの出現によるものと思われる。

米国国立図書館には MUMS (Multiple Use of MARC System) と SCORPIO (Subject-Content-Oriented Retriever for Processing Information On-line) があり、前者は館内業務用、後者は利用者検索用である。SCORPIO ではこれまでに入力された約60万件の図書目録のデータベースを検索でき、1981年には従来のカード目録を凍結し、全てこのオンライン目録検索に切り換える予定である。

地域ネットワークとしては、ニューヨーク公共図書館を中心にコロンビア大学とイエール大学が参加する RLG (Research Library Group) の計画が進行中であり、受入・目録・参考業務を処理し、さらに書誌情報の交換のために議会図書館と直結する予定となっている。現在活動している地域ネットワークとしては、オハイオ州を中心とする OCLC (Ohio College Library Center)、カリフォルニアを中心とする BALLOTS (Bibliographic Automation of Large Library Operations using a Time-sharing System)、WLN (Washington Library Network) があり、各システムや対象業務の差はあるが、目録業務の共同処理を中心として図書館ネットワークを形成している。新しい計画としては、最近シカゴ大学が図書館業務全般を処理するトータル・システムとして University of Chicago Library Data Management System を完成させたが、このシステムを中心に MIDLNET (Midwest Region Library Network) を計画中である。

このネットワークの考え方は、参加館の対象業務と処理量に応じて、端末、ミニコン、大型計算機を置き、本部の電算機と直結することになっており、非常に融通性のある部分分散処理の形と言える。

米国の地域図書館ネットワークの形式は早く、自然発生的に生まれたので、これらのネットワーク間や各種情報処理機関との調整を目的として、図書館・情報科学国家委員会が設置され、1975年にはその報告書が出された。これは情報を国家資源の一つとして位置付けし、地域・階層の差なく平等に利用できるようにすべきであるとし、このために電算機・通信技術を利用し、各地域ネットワークと情報処理機関の秩序ある発展を促し、それらを結びつけることによって全国図書館ネットワークの形成に向かおうとするものである。以後、米国議会図書館にネットワーク開発部を設置し、同委員会と共にその目標に向かって精力的に研究・調査を行っている。

以上のように各国の図書館の機械化は個々の図書館単位の機械化ではなく、相互協力を前提とする地域（専門別・館種別を含む）図書館ネットワークの形成と共にそれらを相互に結びつける全国図書館ネットワークの形成に向かっている。

我が国においても国立国会図書館で1968年から図書館ネットワークの重要な役割を担うJAPAN MARCの事業が開始され、同館に納入される新刊書の目録データが全て機械可読の形に入力されるようになり、昨年12月には同館の30周年を祝して、「図書館ネットワーク」をテーマに国際シンポジウムを開催している。日本科学技術情報センターでは昭和44年に出されたNIST (National Information System for Science and Tech-

nology) 構想を受けてJOIS (JICST On-line Information System) を完成し、1976年より公衆回線を通じて全国各地から医学文献・化学文献等の二次情報のオンライン検索が可能となった。大学関係でも昭和48年に出された学術審議会学術情報分科会の「学術情報流通体制の改善について」の中でその基本的な考え方が打ち出され、その具体的なシステムの在り方が大学図書館改善協議会相互協力専門部会・機械化専門部会によって検討され、昭和49年にその報告書が出されている。このあと、東京大学のTOOL-IR (Tokyo University On-Line Information Retrieval System) と筑波大学のIDEAS (Interactive Data base Easy Accessing System) が完成し、公衆回線を通じ全国各地から各種二次情報のオンライン検索が可能となっている。昨年暮、文部省は学術審議会に対し「学術情報システムの在り方」について諮問し、学術情報処理システムの確立及び一次情報の収集整備とその利用体制の高度化等が検討項目となっており、共同利用体制を基盤にした学術情報処理センターを中心とする図書館ネットワークの可能性も出てきた感じである。一方、東京大学情報図書館学研究センター長の藤原鎮男教授を研究代表者とする科学研究費による「大学図書館の情報処理トータル・システムの開発」が進められており、我が国の大学図書館のネットワーク化の夢も非常に現実性を帯びてきた。

今度の海外出張を通じ、内外の図書館をとりまく環境の急激な変化を目のあたりにして、この変化に対し、京都大学の図書館としてどのように対応すべきが今後の大きな課題であると痛感している次第である。

## 図書館60年の回顧

谷口寛一郎

大学図書館史として始めて刊行せられた「京大図書館60年史」は思い出の多い重要な図書である。第30頁に大正7年図書館略図が載っているが、煉瓦造りの事務室（現教育学部図書室）の竣

工した時で私が始めて出勤、記念展観準備の手伝いをした頃である。渡り廊下で北へ続く木造平屋建は医科大学から移したもので北側3室は法科大学図書室（後の法経図書室）、南側の事務室は図